統合失調症患者に対するタブレット端末を用いた心理教育の有用性

医療法人社団　五稜会病院
○新山浩太・薮内裕介・鈴木美伸
浮田志保・飯沼紀子・中島公博

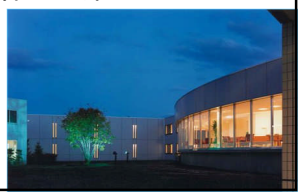
はじめに

- 統合失調症の心理教育の重要性は、多くの研究で明らかにされている
- 長期療養患者では、陰性症状・ストレス耐性の低下から参加への動機付けが容易ではない
- タブレット端末は、新しい学習スタイルとして様々な分野で注目され、医療の現場でも期待されている
- 今回、iPad用アプリケーションを使用した取組みについて報告する

五稜会病院の概要

- 札幌市北区に位置する単科精神科病院
- 病床数　193床
  - 急性期病棟38床
  - 療養病棟107床（開放54床　閉鎖53床）
  - 思春期・ストレスケア病棟　48床

各種精神科疾患に対し積極的に心理教育を実施している



＜対象＞

当院入院中の統合失調症患者50名
（男性23名・女性27名・平均年齢46.5才）

＜期間＞

平成23年12月～平成24年3月

＜方法＞

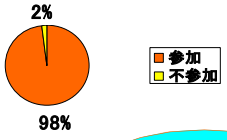
●看護師1名に対し患者1～2名で 実施

●iPad用アプリケーション（医師と一緒に治療を選ぶためのアプリ、大塚製薬株式会社）を使用

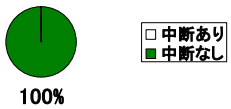
①疾患理解②薬を知る③薬を選ぶ、の3項目で構成されており、各項目ごとに 理解度チェックを行なった

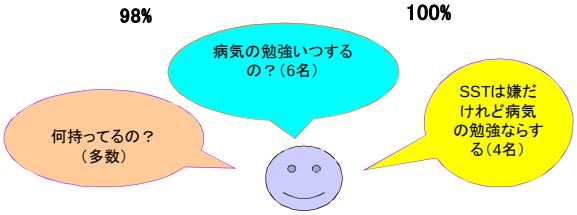
結果1　参加状況

51名に声をかけ50名が参加

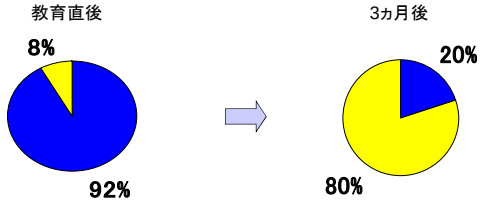


全員が最後まで集中





結果2　学習効果　～心理教育直後と3ヵ月後の理解度～



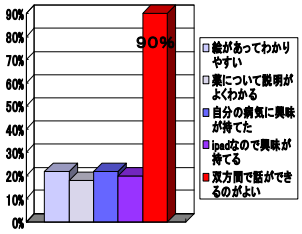
教育直後は92%であったが、3ヵ月後には20%に低下

「機械をもってやった」という記憶はあるが、内容については覚えていない

結果3　満足度チェックの結果（複数回答可）

回答者　50名
複数回答者36名

- 絵があってわかりやすい。11名22%
- 双方間で話しができるのがよい。45名90%
- 薬について説明がよくわかる。9名18%
- 自分の病気に興味が持てた。11名22%
- ipadなので興味が持てる。10名20%



考察1　繰り返し学習する必要性

～心理教育直後と3ヵ月後の理解度の結果から～

「短期記憶はリハーサルを繰り返すことで長期記憶へ移行することができる(坂井ら)」

統合失調症の患者（脳の機能障害）
短期間のうちに再学習をする必要性

参加者：30代～60代が6割

好発は20代前半（山下ら）　進行期は20代～40代（長嶺ら）

●この年齢での学習は、再発や進行を防ぐためにも有意義である

考察2　環境と興味を引くこと

双方間で話しができるのがよい（結果3）

統合失調症はざわめきが苦手
1対1で静かな環境で実施したことが良かった

●患者は個別での心理教育を求めている

ほとんど全員が参加・最後まで集中（結果1）
内容は忘れても機械を使ったことは覚えていた　（結果2）

一緒に作業した・インターネット・動画

結論：
興味を引く導入のツールとしてiPadは有効

【引用文献】ぜんぶわかる脳の事典　坂井　建雄　久光　正　精神医学ハンドブック第7版　山下　格
予測して防ぐ抗精神病薬の「身体副作用」　長峰　敬彦